



神奈川の風



平成28年5月30日号

校長 吉江 明洋

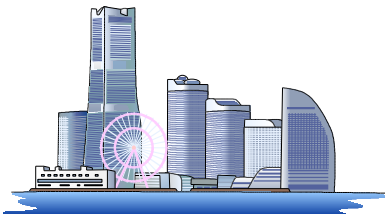
< 6月1日は衣替え >

衣替えとは季節の変化に合わせて衣服を替えること。プリントでもお知らせしましたが、学校・官庁・企業などで制服を着用するところでは、6月1日から夏服へ切り替える日としています。



衣替えは、中国の習慣の影響を受けて平安時代に宮中で始まった行事とされています。鎌倉時代になると、衣服だけでなく、調度品までもが取り替えの対象となりました。江戸時代になると、着物の種類が増え、幕府では公式に年4回の衣替えを制度化して庶民にも広がりしました。明治時代に洋装が広がると、国家公務員が洋装を制服と定められ、明治6年から太陽暦(新暦)が取り入れられたこともあり、日本の気候に合わせ現在と同じ6月1日と10月1日が衣替えの日となりました。この後、学生や庶民にも影響して現在に至っています。

< 6月2日は横浜開港記念日 >



6月2日(木)は、横浜開港記念日。横浜市民であるみなさんの基本知識として、今年も横浜開港記念日の歴史を簡単に紐解いてみたいと思います。

1853年(嘉永六年)6月にアメリカの提督マシュー・ガルブレイス・ペリーが四隻の黒船を率いて浦賀沖に現れて始まった日本の開国騒動ですが、最初に調印された日米修好通商条約で、1859年(安政六年)に神奈川・長崎・函館を、アメリカの独立記念日7月4日に開港することになっていました。オランダはこれに習い、ロシア・イギリスは7月1日、フランスはナポレオン三世の誕生日8月15日と考えていました。しかし、結局のところ5カ国すべてに対して7月1日(明治5年まで用いられていた旧暦では6月2日)に開港されることになりました。

「横浜沿革誌」によると、当時、横浜村の入り口にあった州干弁財天の例祭は本来8月15日でしたが、1860年(万延元年)の6月2日、開港一周年を記念するための祭礼が行われ、以後、祭礼はこの日に変えられました。これが横浜開港記念日の起源となりました。

1909年(明治42年)には、開港五十年祭が全市を挙げて盛大に行われ、開港記念会館が建設され、現在の浜菱(ハマ)の市章と横浜市歌がこのとき定められました。

1958年(昭和33年)は99年目にあたりますが、数え百年として開港百年祭が挙行され、マリンタワーが建設(1961年完成)されました。開港百五十周年祭は、2009年(平成21年)に行われましたので記憶にあると思いますが、あれから早くも7年が経ちました。

開港当時の横浜村は人口482人であったのが、現在横浜市の人口は370万人を突破し、全国の市町村で最多。都道府県と比べても全国10位の静岡県に匹敵する大都市となりました。